2024年10月20日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

神に立たされ、生きる

［エレミヤ書10章17～24節］

包囲されて座っている女よ
地からお前の荷物を集めよ。

主はこう言われる。見よ、今度こそ
わたしはこの地の住民を投げ出す。わたしは彼らを苦しめる
彼らが思い知るように。

ああ、災いだ。わたしは傷を負い
わたしの打ち傷は痛む。しかし、わたしは思った。「これはわたしの病
わたしはこれに耐えよう。」

わたしの天幕は略奪に遭い 天幕の綱はことごとく断ち切られ
息子らはわたしのもとから連れ去られて　ひとりもいなくなった。

わたしの天幕を張ってくれる者も　その幕を広げてくれる者もいない。

群れを養う者は愚かになり 主を尋ね求めることをしない。

それゆえ、彼らはよく見守ることをせず 群れはことごとく散らされる。

声がする。見よ、知らせが来る。北の国から大いなる地響きが聞こえる。

それはユダの町々を荒廃させ 山犬の住みかとする。

主よ、わたしは知っています。人はその道を定めえず
歩みながら、足取りを確かめることもできません。

主よ、わたしを懲らしめてください
しかし、正しい裁きによって。怒りによらず　わたしが無に帰することのないように。

[1] 本当の＜歴史＞を導いておられるのは、神

　聖書は＜神様の歴史の書物＞ということが出来ると思います。私たちは「歴史」を学んだりする時、それを「人間の歴史」として学ぶのではないかと思います。例えば、この時代はローマ帝国が支配していたとか、或いはイギリスだったりとか、アメリカだったりとか、この国は植民地になっていたとか、そういう国や人間の支配の歴史といったものを主たる歴史として学ぶようになっているように思います。しかし、本当の意味でこの世界を導いているのは、そういう権力かといえばそうではないのだ、本当に支配し、導いているのは神様なのだ、ということを教えてくれているのが＜聖書＞なのだと思います。

旧約聖書の「エレミヤ書」を読んでいますが、その当時の大国のアッシリアという国がバビロンに征服され、そのバビロンによって、イスラエル王国は、「バビロン捕囚」という亡国の憂き目に遭ったと言える状態に陥ってしまった、そのような歴史が背景にあります。そしてそれは、人間的な目から見れば確かに人間の歴史なのですが、もっと大きく、その歴史の背景には神様がおられるのだ、ということを私たちは聖書から知らされます。

エレミヤ書の10章ですが、18節と21節をもう一度お読みします。―「主はこう言われる。見よ、今度こそわたしはこの地の住民を投げ出す。わたしは彼らを苦しめる。　彼らが思い知るように。」 「群れを養う者は愚かになり 主を尋ね求めることをしない。

それゆえ、彼らはよく見守ることをせず 群れはことごとく散らされる。 」

 これは恐ろしい言葉ではないでしょうか。＜今度こそわたしはこの地の住民を投げ出す。わたしは彼らを苦しめる＞と神様が言われているのです。その理由は、＜群れを養う者は愚かになり 主を尋ね求めることをしない＞から、＜群れはことごとく散らされる＞と。つまりイスラエルの国はバラバラになってしまうと。これは、神様の＜審き＞ですよね。主を離れてしまった民は、主によって裁かれる、ということを一面厳粛にエレミヤは語っているのです。

[2] エレミヤの忍耐

　私は何度も思ってしまうのですけれども、「預言者はつらいよ」だと思うのです。預言者は、当時の者たち（その中には権力者もいれば、一般の民衆もいたでしょう）に、あなたたちはこのままでは裁かれて、今の生活も破壊されてしまいますよと告げなければいけないそういう使命です。19節で、エレミヤは苦しみながら自分の心を吐いています。―「ああ、災いだ。わたしは傷を負い　わたしの打ち傷は痛む。しかし、わたしは思った。「これはわたしの病　わたしはこれに耐えよう」」。―エレミヤは、同国人の不信仰がもたらした不幸を、自らの「傷」「打ち傷」「病」として受け止め、それに耐える、と言っています。ここに、あのイザヤ書53章の「苦難のしもべ」にも通じる深い信仰を見ることが出来ると思います。彼は、民全体の不信仰を自分の身に感じ、神様の懲らしめをじっと忍耐しているのです。それは私たちの想像を超えたものだと思います。けれどもまた同時に、エレミヤが「耐える」ことが出来るのは、逃げ出さないということですから、神様が必ず最後には治めて下さるという深い信頼があったのに違いないと思います。彼には、味方がいたのでしょうか？きっといなかった。彼は独り孤独に、しかしこの時、神様が導かれる重大な歴史の転換点を担っていたのだと思います。

[3] マルチン・ルターと『神はわがやぐら』

今月の31日は、いわゆる「宗教改革記念日」です。あのマルチン・ルターによる、聖書の言葉が、すべての人の許に届くきっかけになった記念日です。ルターは最初は大それたことを考えていたわけではなかったのですが、一人で聖書の言葉と向かい合っている内に、今の教会のままではダメだと、イエス・キリストの十字架の赦しというものがあたかもお札を買えば（献金すれば）与えられるようなシステムに陥っていると感じ、ヴィッテンベルグのお城の門に「イエス・キリストが「あなたがたは悔い改めなければならないと語られた時、それは私たちの生活の一瞬一瞬が悔い改めであることを神はお望みであることを語っているのだ」と、当時の教会のシステムに対して「95箇条の提題」を打ち付けたと言われています。それが1517年10月31日。キリスト教会の大きな歴史の転換点です。私たち一人ひとりが個人的に祈り、神様と出会うことが何よりも大事だと説いたのです。私は、何かエレミヤとだぶるような気がしたんです。「今、自分が神様の御声を聞き、神様に立ち帰ろう！」。メッセージの中核はこれですね。そのために二人は痛みながら、傷を負いながら、民衆が神様と真に繋がることが出来るように苦闘したのです。（もちろん、他にも色々な信仰の先達が世界中にいた訳ですけれども）。

今日は、後で皆でそのマルチン・ルター作詞作曲の『神はわがやぐら』を讃美したいと思っていますが、この讃美歌について、ルター学者で牧師だった徳善義和先生が『神の乞食（ルターの生と信仰）』でこのようなことを書かれていました。

「彼は非常に辛い境遇に追い込まれてしまう時が何度もありました。1528-29年は、彼の人生の谷の時期でした。ルターは（流行病の）ペストにはならなかったけれど、色んな病気にかかりました。またエリザベートという娘が生まれて11ヶ月で死んでしまったのです。外からも色んな問題を持ちこまれ、身心共に疲れきり、沈うつな苦しみの時代でした。その時に出来たのが讃美歌『神はわがやぐら』なのです。ルターの深い信仰が溢れ出た力強い讃美歌ですが、それを作った時のルターは最底の状態で、そんな言葉が所々表れています。「苦しめる時の近き助けぞ」、神様が、この苦しんでいる私の「近い助け、盾」になって下さる、人間の力はやがて朽ちて行くけれど、イエス様こそは「あまつ大神」として私たちと一緒にいて下さる。「悪魔、世に満ちてよし脅すとも、神のまことこそ我が内にあれ」、周りから四方八方、色んな問題が襲いかかってきて、マルチンを攻めつけるけれど、しかし、主の言葉は必ず勝つ。「我が命も我が宝も取らば取りね」、自分の命も病気で明日をも知れない。自分の愛する子エリザベートも奪われた。しかし、取るなら取ってみよ、神の国はとこしえに続く、と。この讃美歌は「神は我らの避け所、また力。悩める時のいと近き助け」という詩編46編に基づいています。ルターが自分の人生の中でもっとも危機に追いつめられた時、この言葉によって讃美歌を作ったのです」。このように書かれていました。私はこの讃美歌、好きです。自分の葬儀の時には歌って欲しいと思っている讃美の一つです。

[4] 預言者」でなく、イエス・キリストがいる！

 エレミヤは24節でこのように神様に祈っていますね。―「主よ、わたしを懲らしめてください。　しかし、正しい裁きによって。怒りによらず　わたしが無に帰することのないように」 。これはエレミヤの執り成しの祈りだと思います。わたしを懲らしめ、どうか御怒りではなく、全く無に帰することのない程度に正しく裁いて下さい」と。私たちはこの成就を、主イエス様の出来事によって知らされています。私たちが全く滅んでしまわないために、神様ご自身であられるお方が、神様の懲らしめを受けて下さったのです。十字架ですね。しかし、まだこの時代では、預言者が、神様によって立たされたのです。彼らは苦しみました。苦しむことによって、人間に不信仰を気付かせ、また、人知れず涙を流しながら祈っていたのです。こういう預言者たちの存在によって、＜歴史＞は保持されて来たのではないでしょうか？＜歴史＞を本当に担ってきたのは、ローマ皇帝でも、ナポレオンでも、アメリカの大統領でもなく、このような預言者たちだったと言えるのではないでしょうか？

しかし、この「預言者」、新約に入るともう登場してきません。いるとすればバプテスマのヨハネで最後です。そのヨハネは言いました。「見よ、あの人だ」と言って、イエス・キリストを指さしました。そうです、私たちはもう、イエス・キリストを通して、直接に神様と対話が出来るのです！このお方こそ、「あまつ大神」であり、「わが近き助け」です。このお方に遠慮なく近づくことが出来る時代が来ているのです！あのヨハネ4章に出て来るサマリヤの女性にイエス様は言われましたね。「そのような方が来られる時、私たちに一切のことを知らせて下さいます」と言った言葉に、「それは、あなたと話をしているこのわたしである」と。私たちは、このイエス・キリストと今一緒に生きて行くことが許されているのです。

あのルターの有名な言葉です。「大胆に罪を犯しなさい。しかし、さらに大胆にキリストに信頼し、喜びなさい」と。私たちもまた、この主に立たされ、生かされているお互いとして、心から神様を讃えつつ前進して行きましょう。お祈りを致します。

主イエス・キリストの父なる神様、今、主イエス様によって、あなたと親しく交わりながら、また、文句さえも言いながら生きて行くことが出来るそのような世界を与えて下さり、感謝致します！この歴史も、私たちの人生そのものも、まことの支配者、まことの導き手は、あなた以外にありません。どうか、私たちの心を、あなたに向かって大きく広げさせて下さい。日々、感謝と悔い改めの心を頂きながら、この地上を生き抜かせて下さい。主イエスの御名によって祈ります。アーメン。